

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 在外研究
 2014 年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職		氏 名				
	文学部・教授		新 田 啓 子 印				
研究テーマ	再建期以降のアメリカ文学における恥辱表象の思想史の実証研究						
全研修期間	2013 年 9 月 5 日 ～ 2014 年 9 月 15 日 (376 日間)						
経 費	年度経費	SFR 申請額	所属学部からの補助額	SFR 助成額			
	2013 年度	0 円	1,000,000 円	0 円			
	2014 年度	1,511,402 円	1,000,000 円	511,402 円			
主な滞在国 及び 研究機関名	国 名	研究機関名					
	アメリカ合衆国	イエール大学 (Yale University)					
研究成果の概要 (図・グラフは使用しないこと)							
<p>本研究は、2010 年度に着手され、2013 年度末に完結した科研費基盤研究(C)「近現代アメリカ文学・文化における恥の表象」(研究代表者・新田啓子)の遂行過程に見出された個別の問題を、同研究の終了後なお5ヶ月半にわたって継続される在外研究期間を活用し、独立した枠組みで探究したものである。この間の研究対象は、同科研費課題を含め、従来私の研究においては副次的であった①北部奴隷解放活動家の人種観と、②再建期(＝奴隷解放後)のアメリカ社会が進んだ方向に関する、北部知識人のいわば「自己評価」とも呼ぶべきものであった。それらを示す史料のうちに、「恥」の意識や言説ならびに表象のあらわれを探ることが、本研究の中心的な作業となった。</p> <p>イエール大学で客員研究員を務めた全任期中にわたって取り組んだのは、(1)20世紀中盤までの黒人文学・思想に現れた恥辱形象のできる限り完全な網羅、(2)北部奴隷解放論者の思想・言説傾向の正確な把握、(3)南部ならびに南北戦争に関する南北両者の記憶、歴史認識ならびに学術的史観の系統的な整理、(4)その知識を踏まえた実証的な作家研究・作品分析、ならびに(5)英語による成果公開であったが、特に SFR の交付を受けた期間には、上記(2)～(5)に専念した。また、それに加え、アメリカでは、私の主たる研究課題と呼応する日本文学・文化・思想をめぐる諸相に対して関心を抱く研究者も多かった。それらを比較論的に講じることが求められたため、別途進めていた日本のモダニズム文学における人種意識をテーマとした論文を準備し、2度の講演に応じた。さらに、(4)にあたる作家研究・作品分析の一端をなした Stephen Crane, <i>The Red Badge of Courage</i> 論、現代アジア映画の恥と名誉の表象論をまとめ、国際学会において2度の口頭発表を行った。</p> <p>今在外研究における最大の成果は、同大バイネキー稀覯図書館とスターリング記念図書館において、一次資料の集中的な調査と検討ができたことである。特に今回初めてアクセスが可能となり、集中した調査を行うことができたものは、Slavery and Abolition Collection に収められた南北戦争と再建をめぐる記録と、1940 年代～1990 年代にわたって形成された、同戦争に関する歴史認識の変遷を示す史料であった。まず、南北戦争から再建期の動向に関しては、北軍士官として同戦争に従軍し、戦後も Department of the South と Freedmen's Bureau の官僚として南部にとどまり、黒人解放民の処遇に関する政策に携わった Rufus Saxton の半世紀にわたる手記を閲覧した。これは、北部主導の再建をめぐって</p>							

研究成果の概要 (つづき)

働いた政治力学が、実務を担った個人によっていかに評価されていたか、その一端を伝えている。

他方、南北戦争後の南部復興が、黒人解放民自立政策(所謂 40 エーカーと驃馬 1 頭)の失敗や北部資本による経済的領有に終わってしまったことは、すでに様々な角度から明らかにされてきたが、そうした状況を具体的に示した史料としては、“American Colonization Society Record”の重要性を確認できた。北部奴隷解放論とも深い文化的つながりを持つ人物が、黒人解放民を中米プランテーション経営に役立てようとしていた史実を示すこの記録は、奴隷解放論者の決して黒人本位ではない人種観ならびに、再建による連邦強化後、帝国化した合衆国の歩みを裏打ちしている。同時にこの史料は、「恥」という言葉をもって社会批判を行った Harriet Beecher Stowe や Mark Twain の文学作品を解釈するうえでも、非常に重要な歴史的背景を示していることがわかった。

これらの歴史的文献は、南北戦争における北軍の勝利の影に隠蔽された黒人解放政策の失敗が、リベラリズムと人種主義という背反したロジックに基づいて西部や中南米、さらには太平洋への膨張を遂げた合衆国近代の、文化的問題の根源を示唆していると言えるだろう。例えば社会学者 William Graham Sumner 等の重要な知識人が、19 世紀後半にはすでにそうした兆候を批判的に意識し、同じく「文化的恥辱」という語彙を用いて論じていることも、本研究の文献調査で明らかとなった。

これまでアメリカ研究の分野では、「恥辱」というレトリックが同国の歴史認識や文明観を語るキーワードであったという事象についての主題研究はないに等しい。しかし、例えば歴史家 C. Vann Woodward や Bertram Wyatt Brown 等による合衆国南部史を中心に置いて状況を見直せば、「恥」という自己批判的意識から再建期／膨張期の合衆国の自画像を描いた潮流の存在を跡付けることは可能であり、またそうした解釈の必然性・重要性も明らかになると思われる。本研究は、大局においてはその記述をなすための基礎的文献調査であり、1870 年代～1940 年代に生み出された文学作品に頻出する「恥」という言葉の意義を実証的に裏付けるための作業となった。以下成果欄に記したように、段階的に明らかとなった各論的テーマを随時公開したが、最終的な単著化も含め、研究総体に関わる成果公開は、帰国後も続けられている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 5 項目で記入)

[アメリカ] [南北戦争] [恥辱] [情動] [歴史認識]

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

1. Nitta, Keiko. “Ethical Globality: Tracing the Theme of Reconciliation in the Age of the “Transnational Turn”.” *AALA Journal* 20 (2015 年): 75-83.

② 図書 (分担執筆)

- 2. 新田啓子「島の時代のニューヨーク—モダン都市における人種」『移動者の眼が露出させる光景』澤田直編。弘学社、2014 年 (225pp)。
- 3. 新田啓子「恥辱の亡霊—スティーヴン・クレインの戦争小説」『抵抗することば—暴力と文学的想像力』藤平育子、高尾直知、古津智之編。南雲堂、2014 年 (368pp)。

③ 招待講演会

4. Nitta, Keiko. “Black Bottom of Modernity: Racial Imagination of Japanese Modernism.” (2013 年 11 月 5 日), College of William and Mary (Virginia, USA) .

5. Nitta, Keiko. “Black Bottom of Modernity: Racial Imagination of Japanese Modernism.” (2014 年 3 月 24 日), University of Louisiana, Lafayette (Louisiana, USA) .

④ シンポジウム・学会発表

- 6. Nitta, Keiko. ““A Spector of Reproach”: Revisiting Figures of Shame in *The Red Badge of Courage*.” The Stephen Crane Society, “Culture and Context in Stephen Crane’s Work” (2014 年 5 月 23 日), American Literature Association (Washington, DC, USA, May 21-24, 2014).
- 7. Nitta, Keiko. “Beautiful Vengeance: Martial Arts Films *à-la-mode* and the Aestheticized Ethicized Contest” (2014 年 7 月 3 日), Association for Cultural Studies, Crossroads 2014 (University of Tampere, Tampere, Finland, July 1-4, 2014).

※この(様式 2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。